

高津区おはなしアーカイブ

●遠藤 尚次 (えんどう しょうじ) さん

大正15年生まれ 92歳
川崎市高津区久地在住



◆生い立ちと家族構成

生まれたのはここ久地。九人姉弟で、私は三男。上から長女、長男、次女、次男、三女、三男と女と男が交互に生まれ、私は6番目。私まではうまくいっていたのですが(笑)、私のすぐ下はまた男で、そのあと女が二人続いて産まれました。

当時の家族は、両親と姉弟、それから文久(ぶんきゅう)生まれの祖母。祖母は90歳以上まで生きていました。

家は代々農家で、畑で野菜、田んぼでお米を育てていました。私の子どもの頃は、馬もいたんですよ、農耕馬が一頭。繁忙期以外はエサをやるのが大変だから、津久井の方に預けていました。で、畑や

田んぼを耕すときだけ歩いて津久井まで取りに行っていたようです。

親父は日露戦争のときは馬に乗る兵隊で、千葉にあった騎兵隊を除隊してこちらに戻るとき、馬に乗って帰って来たと聞きました。親父の戦友が津久井にいたので、馬を使わないときはその戦友のところに預けていたようです。

◆子どもの頃の遊び

子どもの頃は、メンコや、ベーゴマで遊んでいました。近所には子どもが大勢いました。今と違って兄弟が、たくさんいたから、遊び仲間は多かった。うちも9人、2軒隣のうちにも子どもが9人いたんですよ。厚生省から調べが来てね「どうしてもう一人産まなかったんだ」って言われたって。あの当時は10人産むと表彰されたのだそうです。産めよ増やせよって。そんなこと言われたって、こればかりはね(笑)。

◆小学校

入学したのは高津尋常高等小学校。6年初等科のほかに高等科というのが2年あって、8年間学校へ行きました。昔の校舎は平屋。昔は御真影という代々の天皇陛下のお写真を保管している立派な奉安殿が、校門から入ると真正面にあって、その隣に二宮金次郎さんの銅像がありました。登校すると、朝はそこでお辞儀したり、朝礼の時もそこで全校生徒が挨拶したりしていました。

私の学年は4クラス。松・竹・梅・桜。松と竹が男で、梅と桜が女です。人数は男女同じくらいだったかな。

ここら辺りは全部田んぼや畑だったから、学校へはあぜ道を通って行きました。そのほうが近道だからね。

学校へ行くときは洋服。ただ、式典があったときは着物を着てね、袴をはいて行くんですよ。すると、帰りには紅白の饅頭をくれる。

勉強はあんまりやらなかったな。高等科になったらね、商業と農業に分かれるんですよ。溝口とか二子から来ていた人は商業に進む人が多かった。久地だとか、諏訪だとか下野毛、北見方は農家がほとんどだから農業に進む者が多かった。でも、お大臣の家（お金持ちの家）は高等科には行かないでね、5年制の中学に行ったんですよ、我々みたいな貧乏人は高等科に行くんです（笑）。

高等科に進んでも、その頃は戦争中でね、人手が足りない。うちの兄も出征していないでしょ。うちは、学校のそばに畑や田んぼがあったから、稲刈りなんか、手伝わされた。学校の先生に「今日は稲刈りで休みます」と言うと、「手伝いに行つてやるよ」といって、十人~二十人が手伝いに来てくれました。すると、「あんまり来るとお茶請けが大変だ」と母は言っていたな。お茶請けと云ってね、サツマイモをふかしたものですけどね。おやつも、おむすびなんてなくて、ほとんど毎日サツマイモですよ。

◆子どもの頃の思い出

夏になると、イナゴなどの虫を採って、それを鶏に食べさせるといい卵を産むわけですよ。鶏は20羽くらいいました。みんな放し飼い。上の方に柵を作って、

夜になると鶏たちはそこに乗かって、昼間になると下に降りてきていたね。産んだ卵は全部うちで食べていた。放し飼いだから卵をどこに産むかわからない。気が付かずに古くなっていたこともあった。

その当時の食事は、麦飯だけど、麦ばかりじゃないんです。お米のなかに麦を入れて炊くわけですよ。するとね、麦は軽いから上に浮いてくる。おひつに移すときに、上の麦とお米を上手く混ぜるんだけどね、学校に持って行くときは、白いお米の部分だけを弁当箱に入れてもらっていた。

夏は、よく桃を持って多摩川まで泳ぎに行った。川に行つて川淵を掘ると湧き水がでてくる、そこに桃をつけて冷やしておくのね。多摩川には魚もたくさんいたんです。漁師の舟の横までね、3~4人で魚を追いこんでいくと、魚がたくさん飛び上がるんですよ。マルタというでかいのがね、産卵期に、砂利をきれいにしておくと卵を産みに来るんです。マルタは骨っぽい魚で、よく捕まえていたんですが、そのうち捕らなくなっちゃった。すると、それを売りに来る人がいてね。商売になっていたみたい。

冬は学校から帰つてくると、子守をしながら麦踏みさせられた。子ども一人だと軽いけど、おんぶすると重くなるから麦が良く踏めた。あの頃の子どもは遊ぶ時間も、勉強する時間もなかったですよ、ずっと家の手伝いをしていた。周りの子どもみんな同じ、全部農家だからね、子どもも大事な労働力だった。

昭和8年、私が8歳になった年に親父

が亡くなりました。一番下の妹は1歳くらいだったでしょうね。お袋はずいぶん苦労した、でも農家をやっていたから、なんとか食べるものはありました。

◆ 地元のお祭り

久地のお祭りの時にはね、学校に行っても2時間で久地の人だけは帰れるんですよ。お昼前、10時頃ね。久地の人みんな揃って神社にお参りに行き、いちど解散して、またみんな絆纏着てお祭りに行く。太鼓を叩いたり御神輿担いだり。久地のお祭りの時は久地の子だけが早く帰れたけど、溝口、二子、諏訪のお祭りのときには全校生徒が早く帰れました。総社神社の諏訪と二子と溝口のお祭りのときは、全校生徒が2時間勉強してから、お参りして、解散していました。

◆ 学校卒業後

高等科を卒業してから、軍需工場、今の富士通へ行くようになりました。

会社では組み立てとか、ヤスリを使った仕上げとか、旋盤工とかいろいろ分かれてやっていた。軍需工場だったから、憲兵も入ってきていましたよ。機密が漏れちゃいけないからね。

働くのは朝8時から夕方5時まで。だんだん戦争が激しくなって「月月火水木金金」といって、土日がなくなっちゃった。休みがない、毎日仕事。

◆ 戦争へ

19歳で徴兵検査。それまでは20歳で徴兵検査があったんだけど、私の時は、一年繰り上げて19歳になった。あの時、

繰り上げにしなければ、戦争に行かなくて済んだんだけどね。

溝口の田園都市線と南武線の駅との間に広場があり、部隊はその広場に整列して、軍用列車に乗って戦地に行った。私の乗る列車には北支派遣軍要員って貼ってあったから、「北支へ行くんだなあ」ってね。溝口駅前広場には、大勢見送りに来てくれて、戦地に行きました。

兄貴たちも兵隊に行きました。長男は戦死。次男は負傷し、腕の関節がなかった。日本に戻ってきて、相模原の陸軍病院に1年半くらい入院していた。技術屋だったけど、怪我のために普通のところでは仕事ができないから、自分で溝口に工場をはじめたそうです。

終戦間近、私は中国山東省の北にいたのですが、日本が危なくなってきたから、本土防衛のためと、朝鮮まで戻ってきたら、戦争が終わった。朝鮮でつかまり、ロシア軍にみんな連れて行かれちゃった。北線からロシアの船に乗せられて、陸路は100人ずつ大きな貨車で運ばれ、途中で切り離され、別々の収容所に送られました。私が入られたのは、元ドイツ軍が入っていた収容所。周囲には逃亡しないようにと、バリケードが三重にあった。入ったときは、もう日本には帰れないと思ったよ、もうダメだと思った。

当時、ロシアもドイツと戦っていたでしょ、だからロシアにも男手がないんですよ、兵隊に行ったり、死んじゃったり、だから失った労働力のかわりに、日本人を連れて行って働かせた。冬は伐採。山に入って、木を倒すんだけどね、直径1メートルから1メートル50もある木を

2人で切るんです。2メートルくらいある長いのがぎりね。細い木なら簡単ですけど、直径1メートル以上もある木は本当に大変です。切った木の下敷きになって亡くなった人もいた。そして、とにかく寒かった。口がきけないくらい寒かった。本当に寒い。あんな寒いところでよく生きていたと思うくらい。マイナス30度、空気中の水分が凍って、キラキラ光るんですよ。息を吐くと、それがそのまま凍るんです。

一年目の冬は、寒さと栄養失調で大勢亡くなった。シベリアで死んだ8割以上は、終戦の年だったんじゃないかな。私も足の親指は両方とも凍傷になり、皮膚は溶け、爪もボロボロになっちゃった。軍医さんが「遠藤さん、足の指切ろうかね？」って言われたんだけど「切られちゃうとうちに帰って下駄が履けなくなるから切らないでくれ」って頼んだ。そしてたらそのうちだんだん膿がとれて、きれいになった。切らなくて良かった。

夏になると、国の農場ソフホーズや村の農場のコルホーズで作業しました。トラクターで耕したところにジャガイモを植えて行く。種芋を南京袋いっぱいに入れて、それを担いで植えて行くんだ。大きな畑をひとりで二往復くらいしました。ロシアは土地が広いからね。見渡す限り畑。そこでジャガイモや大豆を作る。春になって野菜が育てば、次の年からは食べるものは大丈夫だった。それに、川にも魚がいるんですよ。堤防なんかにもない自然に流れている川で、夏は靴を脱いで足を洗っていると、魚がチクチクついてくる。傷ついたところを食べに来

るんです。それからスッポン。砂場に卵を産みに来るんです。それをみつけて、帽子一杯卵をとってね。スッポンもつかまえて食料にしたんです。

冬の食事は、朝から晩までジャガイモ。ふかしたもののばかり毎日食べる。だんだん飽きてきてね。ジャガイモを杵でつき、芋餅を作って食べる。それも飽きたらこんどはジャガイモをサイコロ状に切って、芋餅と一緒に煮て、塩を入れて、いろいろ調理法を変えて食べた。そうでもしないともうノドを通らない。見ただけでウンザリしちゃう。ジャガイモはもうたくさんだ、見るだけで嫌になっちゃう(笑)。

◆日本へ帰国

昭和23年、帰国しました。ナホトカから舞鶴港に着いて、そこで3~4日いろいろ聞かれたり、身体検査にいったりして、それから帰ってきました。あのとき、200円くらいもらったんです。「ああこれで家が建つ」なんて思いました。私が兵隊に行ったときは100円で家が建ったからね。ところが、汽車に乗って、サツマイモを買ったら100円取られちゃった。もう、全然、感覚が違うんですよ。だから家に帰ってくるまでに貰ったお金は全部なくなっちゃった。横浜に着いたら、親戚の人や近所の人が15人くらい迎えにきてくれていた。

この辺りの風景はあまり変わっていなかった。帰国したばかりは体が弱っててね、ちょうど5月、田植えの季節だけど、皆が働いているのを見るのが精一杯。栄養失調で、半年くらい働けなかった。入院はせずに、裏の家に乳牛がいた

ので、牛乳を飲んでいただ。今でも牛乳は飲んでいる、だからこんなに長生きできている(笑)。

秋には健康を取りもどし、本格的に農業を、家の跡を継ぎました。

昔、この辺りは桃の産地だったんですよ。多摩川桃って行って、有名だったんです。辺りは全部桃山だった。桃の出荷組合が久地にあり、30~40人くらい組合人がいたんです。多い時はトラック2台くらい桃を積んで、東京まで売りに行っていました。神田まで行くと値がいいんだけど、近場は安い。売り物にならないような桃を仕入れて、それを売る人も毎日来ていました。でも、桃は長く作っていると土壌が嫌う。うちの桃も昔は川崎大師から苗木が来たそうですが、向こうからだんだん川を上がってきたんですね。同じところで栽培すると、土が飽きるんですよ。

帰国したばかりは、畑で麦や芋を作っていました。だんだんカブとかダイコンをつくるようになっていきました。野菜は、東京の青果市場に持って行きました。前の日にきれいに洗ってね。洗い場もコンクリートでつくって。水の中で刷毛をモーターでぐるぐる回して野菜を洗うの。近所の人手伝いに来てくれてね。オート三輪に荷を積んで、朝、暗いうちに持って行く。帰ってきてから、また取ってきて。そこではじめて朝飯を食べるんです。近所の人食事中に荷物をつくってくれて。市場に行って卸す。近いところで世田谷、それから三宿、五反田、新宿も行ったね。三輪車で。遠くへ行くほど値が良いんですよ。新宿の時は道間

違えてウロウロしていたらおまわりさんがきてね、「何しているんだ」っていうから「家に帰りたいんだけど道にまよっちゃった」ってね(笑)。あの頃の生活は困らなかったけど大変だったね。

年月が経つうちに、共同で耕運機を買って、田んぼを耕すようになったらだいぶ楽になりました。

この辺りの農家は春野菜を栽培し、収穫後は田んぼにして米作り。冬の間は耕して、春まで野菜。5月くらいから田んぼをはじめて、秋にお米を収穫したあとは、また耕して。農業は昭和30年くらいまでやっていました。



結婚は昭和27年、27歳のときです。女房は従姉妹です。お袋が病気で、看病する人は身内が良いって、もらったの。お袋の妹が久地の駅のちょっと先に住んでいたの、そこから嫁にきてもらいました。女房はずっと母親の世話をしてくれたので、農家の仕事はやらなかった。

◆戦後：街の様子、暮らしの様子

溝口駅の南武線と田園都市線の間に関市がありました。あそこに行けば、普通のお店じゃ売っていないものがなんでも売っているの。帰国したのは23年だから、その頃だね。

府中街道から久地に入ったところに「橋本屋」という雑貨屋があり、お酒とか、たいていのものは売っていた。近くには「市野さん」という醤油屋もあって、醤油絞りをやっていた。大きな醤油樽があって、そこでもろみを造って、それを絞って売っていた。お醤油屋さんは、昭和25～26年くらいまではやっていたね。うちでも醤油を作っていた。今、孫の家が建っているところに小屋があって、味噌部屋と、醤油のもろみも大樽にあって、うちで味噌も醤油も作っていました。麻袋みたいなものにもろみをいれ、ギューっと絞る。それを煮詰めて、比重計で測る。煮詰めるときの燃料は薪。家の周りに結構木があったから、それを切ってたね。飯を炊くときは薪じゃないんですよ。藁なんです。藁がなくなると麦わら、麦わらを燃すとバリバリバリバリと音がして、煙が出るの。煙は家のなかにくすぶっちゃうので虫がいなくなる。ご飯はかまどで炊くでしょ、だから美味しかったですよ。蒸れるからね。

醤油は瓶に入れて。味噌も自分のところで、麴を発酵させて一年寝かす。味噌造りも醤油造りも昭和30年くらいまでやっていましたが、手間と時間がだんだん割に合わなくなってきたのでやめました。

食べ物の苦労はあまりしなかった。野菜やお米はうちで取れるし、鶏も飼っていて、卵もあった。でも、そのうち鳴き声がうるさいとか臭いとかで、鶏は飼えなくなっちゃった。

昭和32年に西高津中学校が建てられるまでは、あの辺りにはうちの田んぼがあったんですよ。西高津中学校ができる

にあたって田んぼを手放したんだ。この辺り一帯は砂利場だから、田んぼの上に中学校が建つのかなあって思っていたけど。今でも学校で式典とか運動会があると、来賓として呼ばれます。子どもたちも西高津中学校に通いました。田んぼがあった土地にはアパートを建てて、家の敷地内には息子たちや孫の家も建て、今は農業をしなくてもなんとか暮らしています。

◆今関わっていること

夏は、7月中旬頃から一ヶ月くらい、シベリアに行き、遺骨を掘り出して茶毘に付す活動に関わってきました。20年くらい前、厚労省から依頼されてね。はじめた当初は遺骨の収集はしなかった。埋葬地の調査だけ。どこにどのくらい遺骨が埋められているかを調べてくるの。自分が抑留されたところは大体分かるし、埋葬地は収容所からだいたい300～500メートルくらい離れている場所にあるから。ロシアの村長さんにも協力してもらって調べる。全国抑留者協会から呼ばれてね、埋葬地を教えて欲しいとか、一緒に行って欲しいとか言われるんですよ。今は「抑留者の集い」慰霊祭で語り部を務めています。戦争体験者も年々少なくなりましたし、90歳以上じゃなかったら語り部はできないよね。

(平成30年9月25日取材)